

英国人女性画家エブリン・ダンバーの描いた戦時の ガーデニングとジェンダーをめぐる文化地理学

Cultural Geography of War artist Evelyn Dunbar, gardening and gender

橘 セ ツ

キーワード: エブリン・ダンバー (1906-1960)、第二次世界大戦、公式戦争画家、銃後、女性農耕部隊、Dig for Victory キャンペーン

Key Words: Evelyn Dunbar (1906-1960), The Second World War, Official War Artist, Home Front, The Women's Land Army, Dig for Victory

要 旨

近年、英国では、英国人女性画家エブリン・ダンバー (1906-1960) の作品が再発見され、彼女の作品についての再評価が高まっている。このような英国の研究動向を概観しながら、本稿ではエブリン・ダンバーのライフストーリー／ライフジオグラフィーを紹介する。さらに、彼女が第二次世界大戦中に、公式戦争画家として描いた銃後を守る女性農耕部隊についての作品から、彼女の描いた戦時のガーデニングとジェンダーの文化地理学に焦点を当てて考察する。

I. はじめに

i) 英国人女性画家エブリン・ダンバーについての先行研究：壁画とガーデニングと銃後の公式戦争画家

エブリン・ダンバー (1906-1960) に関する著作が、2000年代以降、以下の3冊刊行されている。

- a) Clarke, Gill (2006) *Evelyn Dunbar: War and Country*. Sansom and Company Ltd. Bristol.
- b) Llewellyn, Sacha & Liss, Paul (2015) *Evelyn Dunbar: the Lost Works*. Pallant House Gallery.
- c) Campbell-Howes, Christopher (2016) *Evelyn Dunbar: A Life in Painting*. Romarin.

これら3冊の著作を順に紹介することで、エブリン・ダンバーについての先行研究を概観する。

a) Clarke, Gill (2006) *Evelyn Dunbar: War and Country*. Sansom and Company Ltd. Bristol.

ジル・クラーク Gill Clarke による『エブリン・ダンバー：戦争と国土 *Evelyn Dunbar: War and Country*.』(2006) は、エブリン・ダンバーの生誕100周年に刊行されたダンバーについてのはじめての本格的な伝記であり、英国人女性画家エブリン・ダンバー研究の嚆矢である。副題「戦争と国土 *War and Country*」が示すように、ダンバーは、第二次世界大戦中の自らの祖国英国の国土の姿を巧みな画力で鮮やかに描きとった人物としてクラークは捉えている。この方面のダンバーの顕著な業績は、1940年3月以降1945年の終戦まで、英国情報省 Ministry of Information の戦争芸術家諮問委員会 the War Artists Advisory Committee (WAAC) との断続的な契約によって給与を支給された公式戦争画家 Official War Artist として、銃後 Home Front の英国国民の生活について描いた合計40点の作品に結晶している。第二次世界大戦中の英国では、多くの女性が看護師として働いた。また、農村では働き盛りの男性の農業従事者が戦地に赴いて不在の間の代替労働力として、第一次世界大戦時に初めて組織された女性の農耕部隊 The Women's Land Army が活躍した。あるいは、都市では銃後の主婦たちは配給の食糧を求めて長い行列に並んで忍耐強く待つといった日々の生活の奮闘を続けていた。戦争芸術家諮問委員会 WAAC からダンバーに求められたのは、そのような銃後の国民の生活の記録を描くことであった。

ダンバーの伝記作者クラークのもうひとつの関心は、英国の第一次および二次世界大戦中の女性農耕部隊 The Women's Land Army の活動であった。クラークは、ダンバーの伝記を著したのと同じ年に女性農耕部隊についての論文 'The Women's Land Army and its recruits, 1938-50' を、英国の村落地理学者 Brian Short, Charles Watkins, John Martin が編集した第二次世界大戦中の英国の農業についての論文集『自由への前線：第二次世界大戦時の英国農業 *The front line of freedom: British farming in the Second World War*. (*The Agricultural History Review Supplement Series 4*) British Agricultural History Society.』(2006) に寄稿している。戦前の英国の農業は、海外からの安価な農作物の輸入に耐え切れず停滞していたが、戦争が始まると食糧輸入の輸送路が絶たれてしまい国民生活を支える食糧を急遽国内の農作物で自給しなければならなくなった。この論文集のタイトル「自由への前線 *The front line of freedom*」は、1940年10月14日にウィンストン・チャーチルが農業従事者を自由への前

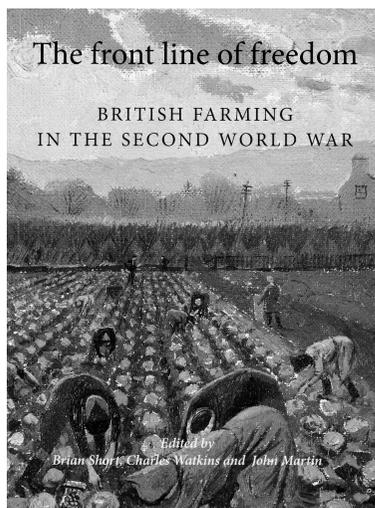


図1 Brian Short; Charles Watkins and John Martin Eds. (2006) *The front line of freedom: British farming in the Second World War*. (*The Agricultural History Review Supplement Series 4*) British Agricultural History Society の表紙に使われたエブリン・ダンバーによる「芽つみ 'Sprout picking, Monmouthshire' (c.1943)」
(Manchester Art Gallery 所蔵)

線で戦うヒーローとしてたたえて鼓舞する愛国的な演説 ‘We rely on the farmers. We depend on the efforts they put forth in the fields of Britain... Today the farms of Britain are the front line of freedom’ の言葉から引用されている。

筆者が、ダンバーに関心を持ったきっかけは、この戦時の英国の農業についての論文集の表紙に使用されたダンバーの作品「芽つみ ‘Sprout picking, Monmouthshire’ (c.1943)」(Manchester Art Gallery 所蔵)であった(図1参照)。この絵で、ダンバーはウェールズ南東部のモンマスシャーにおける農業景観を写実的に描いている。同時に、働く人々の息遣いが聞こえてきそうな、厳かな牧歌的で詩的な印象を筆者はその表紙の絵から受けた。画面には緑色の葉菜の畑が手前から奥へと遠近的に描かれ奥には木製の柵と葉を落とした並木のシルエットがひろがり、電柱と家屋が灰色に遠景に描かれる。冬の陽光が画面全体にやさしくそそぎ、空の雲に柔らかに反射している。畑では緑色の服を着た十数人の農業労働者たちが腰をかがめて、芽つみを勤勉に行っている。収穫を終えた大地の茶色の帯と収穫前の畑の葉菜の緑のコントラストも美しい。この絵は一見すると、勤勉な農民が勤しむ穏やかで平和な農村風景のようであるが、よく観察すると労働しているのは皆女性たちであり、彼女たちが着用しているのは女性農耕部隊の制服である。このことから、この絵は英国の戦時に展開された独特の農業景観を記録的に描いたものだと理解できる。

本書の構成は、「序章 Introduction、初期：ロイヤルカレッジオブアートと画家としての発展期 Early Years: the Royal College of Art and the developing artist、ブロックリー学校の壁画制作：愛のなせる働き The Brockley Murals: A Labour of Love、描かれた田舎とガーデンのある生活：親密な関係 Country and Garden Life Illustrated: an intimate relationship、戦争画家：第二次世界大戦中の銃後を記録する War Artist: Recording the Home Front in the Second World War、後年：ブレッチェリー壁画制作 Later Years: the Bletchley Murals、結語 Coda」となっており、クラークはダンバーの戦争画家としての芸術活動以外の多面的な彼女の人生の側面を見渡している。

クラークは、ダンバーの伝記を2006年に完成させたのち、女性農耕部隊についての研究をさらに深化させて、その集大成の著作『女性農耕部隊 *The Women's Land Army: A Portrait.*』を2008年に刊行した。

b) Llewellyn, Sacha & Liss, Paul (2015) *Evelyn Dunbar: the Lost Works*. Pallant House Gallery.

美術館学芸員 Sacha Llewellyn と美術ディーラー Paul Liss による『エブリン・ダンバー：失われた作品 *Evelyn Dunbar: the Lost Works.*』は、2015年10月3日から2016年2月14日まで英国南部ウエスト・サセックスのチチェスターにあるパラント・ハウス・ギャラリー Pallant House Gallery で行われたダンバーの企画展の図録である。ダンバーの作品の再評価の契機となった最近のエピソードがこの図録の中には語られている。2012年9月にBBCテレビの骨董品を鑑定する人気番組『アンティーク・ロードショー』がスコットランド高地にある Cawdor Castle を舞台に開催された時、ダンバーの新ロマン主義的な作品 *Autumn and the Poet* (1960) がダンバーの関係者から持ち込まれた。テレビでは、プレゼンターの絵画専門家で画廊主 Rupert Maas が

その価値について興奮気味にカメラの前で語るほど、ダンバーの作品の価値は番組の中で高く評価された。のちにこの作品は持ち主によって売却されたが、この図録の編集者でもある美術ディーラー Liss Llewellyn Fine Art の主導で、Maidstone Museum and Bentsley Art Gallery に寄贈された。この企画展は、このように近年ダンバーの作品が再評価されるという背景の中で、ダンバーの関係所の屋根裏部屋からまとまって再発見された未発表の作品群の展示を中心に構成されており、1960年の彼女の死後初の回顧展であった。

この企画展カタログによると展示の構成は、「初期作品と家族の肖像 Early Work & Family Portraits、ブロックリー学校の壁画 The Brockley Murals、ガーデンと風景 Gardens & Landscape、『ガーデナーの選択』の挿絵 *Gardener's Choice*、『ガーデナー日記1938年版』の挿絵に関連する絵画 *Gardener's Diary 1938 & Related Paintings*、子どもの店と商業的デザイン The Children's Shop & Commercial Design、戦時の作品 Wartime、戦後の作品 Post War、スケッチブックとエフェメラ Sketchbooks & Ephemera」である。彼女の作品には、戦時の公式戦争画家として銃後の活動を描いた絵画だけではなく、生涯を通してガーデニングに関連した作品が多く見られたことに特徴がある。

c) Campbell-Howes, Christopher (2016) *Evelyn Dunbar: A Life in Painting*. Romarin

ダンバーについて最も詳細な伝記『エブリン・ダンバー：絵を描く人生 *Evelyn Dunbar: A Life in Painting*』が2016年に刊行された。伝記の作者は、ダンバーの甥にあたるクリストファー・キャンペル-ハウス Christopher Campbell-Howes であり、本書には彼女による大小の数多くの作品がカラーで掲載されており、彼女の作品の豊かさや幅広さを実感できる画集としても鑑賞できる。目次をみると本書の構成は次のように彼女の人生を時代によって区切ってたどることができる：「1 序章：エブリン叔母 Introduction: Aunt Evelyn, 2 初期 Early Years (1906-1933), 3 ブロックリー学校の壁画制作時代 The Brockley Murals (1933-36), 4 親愛なるチャス Dear Chas, (1933-38), 5 ガーデンとガーデニング Gardens and Gardening (1936-1938), 6 時をつくる Making Time (1938-40), 7 戦争画家第1期 War Artist (1) (1940-42), 8 結婚の幕間 Matrimonial Interlude (1942), 9 戦争画家第2期 War Artist (2) (1943-45), 10 戦後のアレゴリーの作品時代 Post-War Allegory (1945-50), 11 同等に風景を愛しかつ描いた人生 A Landscape Loved and Worked in Equal Measure (1950-60)」。]

この伝記は、著者クリストファー・キャンペル-ハウス Christopher Campbell-Howes の叔母エブリン・ダンバーへの身内としての親愛の情と個人的な思い出に強く彩られながらも、聞き取りや客観的な資料からバランスよく彼女の人生が著述されている。本書の巻頭に著者が4歳であった1946年早春に、エブリン・ダンバーとロジャー・フォリー夫妻と一緒に撮ったスナップ写真が掲げられている。この時、エブリンは40歳であった。エブリンは黒い大型犬 'Zim' の首と足元をしっかりと抱えて夫のフォリーに寄り添って、早春の牧草地の地面にくつろいで座っている。犬を挟んで、エブリンの隣には甥のクリストファーが座っている。エブリン夫妻には子どもはいなかったため、クリストファーを可愛がっていたであろうことがよく理解でき

る写真である。本書によるとエブリンはイラストで溢れたユーモアある手紙を多くの知人に送っていた。これらの手紙の中には、子孫の手を経て現在は、美術館のアーカイブに収められているものもある。例えば、本書でも紹介されているエブリンからチャス・マホニーへ宛てた植物や庭園などのイラスト溢れる多くの手紙である（本書「4章 親愛なるチャス Dear Chas, (1933-38)」を参照）。マホニーはエブリンが当時学んでいたロイヤルカレッジオブアートの教師であり壁画制作のリーダーであり、当時の恋人でもあった。マホニーのファーストネームは Charles であったが、彼自身は響きのよい Cyril を好んで使い、エブリンからは Chas と愛称で呼ばれていた。エブリンからマホニーへの手紙は子孫の手を経て、現在はロンドンのテート美術館 Tate Britain のアーカイブに資料として保存されている。一方、マホニーからエブリンへの手紙は、のちにエブリンによって全て破棄されたので、存在しない。本書の著者クリストファーが悔しがるのは、彼が子供の頃から、季節の便り、旅先からの便り、あるいは彼の入学、卒業などのいろいろな節目に、エブリン叔母からイラスト入りの手紙を多くもらったというが、現在は全て無くしてしまったことだという。

以上の3冊の先行研究が、エブリン・ダンバーの絵を描く人生において、共通して重要だと指摘するのは、次の3点にまとめられる。まず1点目は、彼女は、ロイヤルカレッジオブアートの在学中から参加したブロックリー学校の壁画制作のプロジェクトを通じて、画家としての技能を磨き、先輩に画家仲間として認められ、経験を積み成長し、その後、プロの画家となれたこと。2点目は、彼女はガーデニングに関わるテーマを愛し、生涯描き続けたこと。3点目は、彼女は、第二次世界大戦中に銃後を守る人々の生活を描く公式戦争画家として作品が認められたことの3点である。

ii) 本論文の視点：ダンバーとガーデニングをめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィとジェンダーの研究

エブリン・ダンバー（1906-1960）が生きた20世紀前半の生活は、戦争の影響を受けざるを得なかった時代であった。ガーデニング／庭園をめぐる活動の研究においては、第二次世界大戦が激化した1940年代は、「庭園の衰退期」として従来はあまり注目されてこなかった。しかしながら Kenneth Helphand による *Defiant Gardens: Making Gardens in Wartime* (2006) のような研究が示唆するように、第一次世界大戦から湾岸戦争にいたる20世紀のあらゆる戦時下の過酷な社会的、政治的、経済的、文化的状況の環境のなかで、人々は、「自然を耕し」「園芸の作り出す小さな希望のポケット」としてガーデニングを続けていた。本稿は、19世紀から21世紀にわたる200年あまりの間に、ガーデニングに関する言語記述と図像に現れる女性の変化の諸相を見渡す研究の一部である。20世紀は、女性の教育、女性の家庭での役割、女性の社会進出などの大きな変化がみられる。筆者は、これまで旅行・学校・家庭においてガーデニングをめぐるジェンダーのプロセスが前景化することに注目して研究を行っている。あわせて、これらの3つの場所において、より普遍的な社会性・生産性・精神性の3つの価値基準のスケールを組み合わ

せて、ガーデニングの思想と実践の展開について研究してきた (Tachibana 2000; 2004; 2010; 2014; 橘 2006, 2008; 2009, 2010; 2012; 2013; 2016; 星・橘 2011など)。庭園の社会性とは、庭園が個人の地所にある私的な空間であろうとも、庭師やガーデンデザイナーなどの労働と交渉の場所として、あるいは接客空間として、またオープンガーデンなどで公開される機会を通じて社会性を持つことを指す。庭園の生産性とは、キッチンガーデン(家庭菜園)やアロットメント(市民貸農園)のように野菜や果物など食糧を生産するガーデニングの側面を指す。庭園の精神性とは、ガーデニングの実践によって人間のモラルや精神的な価値が高められるような体験全般を示唆する。これら庭園の社会性・精神性・生産性という3つの価値基準は、ばらばらに個別に現れるのではなく、一つの庭園

という場所のガーデニングという行為に強弱のグラデーションを伴いながら、重なり合うようにして認めることができ、ガーデニングの実践を豊かに彩る。本稿では、英国人女性画家エブリン・ダンバーのガーデニングの表象をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー (Daniels and Nash 2004) に焦点を当てる。筆者は、Daniels and Nash の提唱による地理学の中心関心のひとつである空間や場所、風景などに焦点を当てたライフヒストリーの研究を行ってきた (Tachibana 2000; 2004; 2010; 2014; 橘 2006, 2008; 2009, 2010; 2012; 2013; 2015; 2016; 星・橘 2011など)。本研究はその延長に位置するライフヒストリー／ライフジオグラフィーの研究である。エブリン・ダンバーの故郷ケント州ロチェスターの‘The Cedars’ と名付けられた邸宅には、二人の庭師の助けを借りながら、特に母親を中心とした家族で丹精込めたガーデンのある日常生活があった。このような生活を背景として彼女はガーデニングに関する著作と挿絵を描いた。ダンバーは『ガーデナーの選択 *Gardener's Choice*』(1937)、『ガーデナー日記1938年版 *Gardener's Diary 1938*』などを30代の初めに刊行している。

絵を描く生活が戦時となり厳しくなる中で、彼女が職と活躍の場を求めて公式戦争画家として描いた戦時下の活動の中には、英国の銃後を守る女性農耕部隊の従事した農作業が広義のガーデニングとして含まれる。ダンバーが戦時中に描いたのはガーデニングの3つの価値基準のスケールのうち生産性がクローズアップされるようなガーデニングであった。

II. エブリン・ダンバーのライフヒストリー／ライフジオグラフィー

エブリン・ダンバーのライフヒストリーを明らかにする資料として、先に紹介した3冊の刊行された先行研究の著作以外にもうひとつ重要な未刊行の一次資料がある。ロンドンにある帝

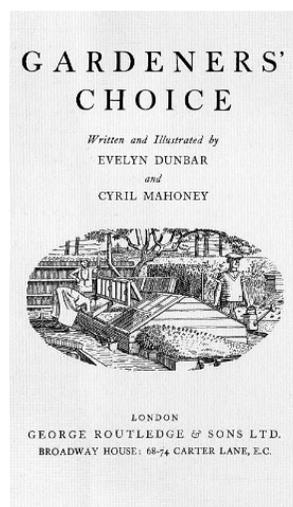


図2 Evelyn Dunbar and Cyril Mahoney (1937) *Gardeners' Choice*. George Routledge & Sons LTD. 初版タイトルページのエブリン・ダンバーによるイラスト

国戦争博物館 Imperial War Museum 所蔵の戦争芸術家アーカイブ War Artists Archive (Imperial War Museum, London) にある、エブリン・ダンバーについてのファイル Evelyn Dunbar ART/WA2/03/074 である。第二次世界大戦中の英国情報省 Ministry of Information の戦争芸術家諮問委員会 the War Artists Advisory Committee (WAAC) がまとめたエブリン・ダンバーの短い伝記が Biography File GP46/34 に記されている。ここには、エブリン・ダンバーが、戦時中の1942年に Roger Folley と結婚する時点までの彼女の伝記が、同時代の視点から簡潔にまとめられている。この資料は436語のコンパクトな分量であり、あくまでも、ダンバーの公式戦争画家としての資質を戦争芸術家諮問委員会が保証するためにまとめられ保存された履歴書・身上書という側面がある。これから、この帝国戦争博物館・戦争芸術家アーカイブ所蔵のエブリン・ダンバーの伝記ファイルの内容を紹介するが、この資料はダンバーの公式戦争画家としての活動に焦点が当てられている。先に紹介した3冊の先行研究も参照することで、内容を補いながら、彼女のライフヒストリーを以下にたどることにしよう。

「1906年12月18日にバークシャーのレディングで誕生。父親は、ビジネスをしており、スコットランドのマレーシャー出身である。母親はヨークシャー出身であり、熱心で才能のあるアマチュア画家である。Born December 18th 1906, at Reading Berks. Father in business- a native of Morayshire, Scotland. Mother a native of Yorkshire- an enthusiastic and gifted amateur painter.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London) と、エブリンの出自を説明することから伝記ファイルが始まる。

伝記ファイルには明記されていないが、父親ウィリアムのビジネスは具体的には、服地屋・仕立屋 draper and bespoke tailor であった。母親の名前はフローレンスといい、アマチュア画家として創作活動をしており、エブリンの芸術の才能は、母親から引き継いだものと考えられる。母親はガーデニングにも熱心であった。エブリンの生まれる前に、両親はすでに4人の子ども Ronald、Jessie、Marjorie、Alec を授かっていた。1905年に5人目に生まれた女子はすぐに亡くなった。母親は子を亡くすという悲しみを経験する中で、すでに入信していた姉のクララ Clara の影響を受け、新キリスト教の一派クリスチャン・サイエンス Christian Science に入信した。クリスチャン・サイエンスとは、19世紀後半にアメリカ合衆国でメリー・エーカー・エディが始めたキリストの教えと癒しの証を实践する新キリスト教である (<http://christiansciencetokyo.com>)。一年後、1906年にエブリンが生まれた。母親はダンバー家の子どもたちをクリスチャン・サイエンスの信仰を持った人として育てることを決意した。エブリンはこのような信仰深い親のもと、宗教的な環境で育った。なお、エブリンの母親をクリスチャン・サイエンスの信仰へと導いた姉のクララ自身も、絵を描いており、エブリンが絵を描くことに終生理解を示した。クララは裕福な夫 Stead Cowling と結婚したが、夫とともにエブリンの芸術活動を支援して、最終的には、1946年にエブリンに遺産を贈った。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

父親は、ビジネスを効果的に拡大していった。「一家は、最初にボーンマスに移り、次にケント州に移り、最後に1913年にロチェスターに落ち着いた。Family moved to Bournemouth, then to

Kent, finally settling in Rochester in 1913.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London)

「ロチェスター女子グラマースクールに1914年から1925年まで通学した。幼少時から多くの時間、絵を描いて過ごした。Began school at Rochester Girls' Grammar School in 1914. Attended there till 1925. Spent much time drawing and painting from earliest memory.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London) 家庭では、アマチュア画家の母親とともに絵を描き、エブリンは Royal Drawing Society competition などのコンクールに出品して賞 (a Kent County Scholarship to Rochester Grammar School for Girls) を受けた。母とともにエブリンは地元のアート団体 West Kent Art Society の会員となって絵画制作に熱心に取り組んだ。(Llewellyn & Liss 2015)

「総合科目を学習し、1923年に大学入学資格試験 (Matric) に合格した。学校修了後、1年間家で過ごした。家では一部屋をアトリエとして与えられ、絵画制作を始めた。Dean's 出版社のために子どもの本を制作した。その後、しばらくは、ロチェスター美術学校へ通った。Took General Schools and Matric in 1923. Spent a year at home after leaving school. Given a room as a studio and began painting. Also did a child's book for Dean's, publishers. Then went to Rochester Art School for a while.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London) この頃、家族に転機があった。父親のビジネスは成功をおさめ、1924年にロチェスターの Strood 地区に父親は17部屋もあるヴィクトリア時代様式の邸宅 'The Cedar' を家族の住む家として購入した。この家には塔があり、その部屋をエブリンと母親が絵画制作のためのアトリエとして使用した。新居には、ガーデンがあり、母親と子どもたちはガーデニングにも熱心に取り組むこととなった。エブリンは1923年に大学入学資格試験 (Matric) に合格 (英語・数学・歴史・植物学・ドイツ語) した。1925年にロチェスター女子グラマースクールを卒業してからの数年間 (1926-28) は、彼女に合う美術大学が見つからず、ロチェスター美術学校に通いながら、家で制作を続ける模索の時期でもあった。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

「1926年には、ロンドンに毎日通学し、ロイヤルドローイングソサエティに1学期通い、次にチェルシーポリテクニクに通い、またロチェスター美術学校にフルタイムで2学期通った。そこでようやくロイヤルカレッジオブアートへ入学するように勧められた。In 1926 went to London daily for a term to the Royal Drawing Society, then to Chelsea Polytechnic, then back to Rochester Art School, full time, for about 2 terms. Advised to go to the Royal College of Art.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London)

「1928年に初めて海外に出かけた。ドイツとオランダに数カ月の旅であった。Went abroad for the first time in 1928- to Germany and Holland for a few months.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London) 伝記ファイルには明記されていないが、Llewellyn & Liss の年譜によると、おそらくエブリンはドイツ人の男性の文通相手に会いにドイツへ行ったが、そこでトラウマになるような手痛い経験をしたのであろうと推測している。その後、彼女はドイツに関することは良いようには言わなくなったという。(Llewellyn & Liss 2015;

Campbell-Howes 2016)

「ケント州奨学金を得てロンドンのロイヤルカレッジオブアート (R.C.A.) へ1929年に入学した。そこに1933年まで在籍した。Awarded a Kent Scholarship to R.C.A. London, and began attendance there in 1929. There till 1933.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London) エブリンは、ようやく彼女の才能を活かすことのできる名門美術大学ロイヤルカレッジオブアート (R.C.A.) で活躍の場を得た。彼女は23歳になっていた。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

「1930年には、A. Gwynne-Jones 教授とその母親の住むロンドン北郊のハムステッドの家に下宿した。図書館通いを楽しみ、絵画や画家たちに出会った。1932年彼女が R.C.A. の4年生の時、ブロックリー学校の壁画制作プロジェクトに参加した。その巨大壁画制作は R.C.A. で教えていた画家シリル・マホニー Cyril Mahoney の指導のもとですすめられた。彼女は、その壁画制作に携わることで充実した3年間を過ごし、この壁画制作を通じて絵画について多くのことを学んで収穫を得た。In 1930 lived at Hampstead with Professor A. Gwynne-Jones and his Mother. Enjoyed the library and introduction to painting and painters. In 1932, 4th year at R.C.A. was sent to Brockley School, S.E., to paint some large murals under the direction of Cyril Mahoney, who taught at the College. Spent a fruitful 3 years there, and learned a great deal about painting.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London)

エブリンは、1932年に R.C.A. を卒業したが、引き続き、壁画制作のチームで壁画を描いた。壁画制作を通じて、エブリンと3歳年上のマホニーは恋に落ちた。両者とも植物やガーデニングへの興味を共有することからも愛が育まれた。卒業後のエブリンは、無給の壁画制作では自立することは難しく、裕福な叔父の Stead Cowling (エブリンの母の姉クララの夫) の援助を受けて壁画制作や絵画制作活動を行った。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

「1936年にブロックリー学校の壁画制作が終わった。その後は、1年間『ガーデナーの選択』という本を、マホニーと共著で書き、挿絵を描いた。1938年に、ロチェスターで彼女の絵画の展覧会を開いた。そして、彼女は常設展示のできる小さなギャラリーを始める考えがあった。しかしながら危機的な時局であり、その計画はうまくいかず、諦めることとなった。In 1936 finished at Brockley, and thereafter spent a year writing and illustrating a book called Gardeners' Choice, in collaboration with C. Mahoney. In 1938 organised an exhibition of contemporary painting in Rochester, and had ideas of starting a small permanent Gallery, but the crisis conditions seemed to make the venture unsuccessful and it was abandoned.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London)

最終的には、エブリンとマホニーの関係はうまくいかなかった。おそらく二人の思想的な背景があまりにも違いすぎたからではないかと Campbell-Howes は推測する。エブリンは、家族の結びつきが強く、裕福な商店経営者の両親から引き継いだ保守的な背景を持ち、宗教的にはクリスチャン・サイエンスの信仰があった。マホニーは、ロンドンの先鋭的な芸術家であり左翼で、無神論者であった。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

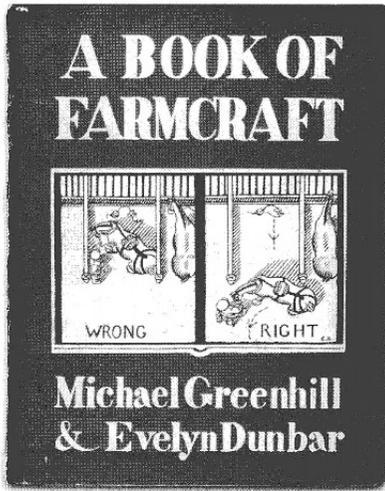


図3 Michael Greenhill & Evelyn Dunbar (1942) *A Book of Farmcraft*. Longman Green and Co. の表紙

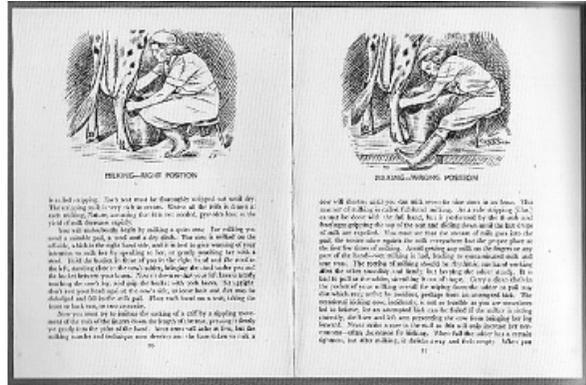


図4 Michael Greenhill & Evelyn Dunbar (1942) *A Book of Farmcraft*. Longman Green and Co. より搾乳の正しい位置(左)と誤った位置(右)の図解

「1939年に戦争が勃発してからは、画家にとっての状況は暗黒であった。そこで、姉の経営する雑貨店を、ウールを縫製し、シルクを刺繍するなどして6ヶ月間ほど手伝っていた。1940年に戦争芸術家諮問委員会から女性農耕部隊を含む戦時の女性の活動について描くように依頼された。その年の夏、女性農耕部隊についての絵画の素材を得るために、ウィンチェスターの近くにある Sparsholt Farm Institute へ行った。彼女はこの場所を非常に興味深く思った。その農業指導者の Michael Greenhill に会って、農場についての道具の解説本 *A Book of Farmcraft* を共同で執筆する計画となった。この計画は Longman Green and Co. 出版社に受け入れられ、その本は1941年に刊行された。At the outbreak of war in 1939 conditions for artists looked black, so helped in a sister's shop for six months, sewing wool and broidery silk etc. In 1940 commissioned by the Artists' Advisory Committee to paint women's war activeties including Land Army. In the summer of that year went to Sparsholt Farm Institute, near Winchester to get material for W.L.A. pictures. Found this place very interesting. Met Michael Greenhill, instructor there, and planed to collaborate in a Book of Farmcraft. This plan was accepted by Longman Green and Co., and the book was carried out in 1941.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London)

「1941年9月に、情報省から再び看護についての画題で描くように依頼があった。そこで、サリー州の Pysford に疎開している聖トマス病院でしばらく過ごして、絵画の素材を集めた。看護の色々な場面を組み合わせた大きな組み絵を描き、1942年10月に完成した。In September 1941 commissioned by Ministry of Information again to paint nursing subjects, and spent sometimes at St. Thomas's Hospital evacuated to Pysford, Surrey, collecting material. Began a large composite picture, and completed it in October 1942.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London)

「1942年8月に空軍の航空士の Roger Folley と結婚した。In August 1942 married to Flying Officer Roger Folley, R. A. F. V. R.」(Biography File GP46/34, War Artists Archive, Imperial War Museum, London) ここでエブリンについての戦争芸術家諮問委員会 WAAC の Biography File GP46/34 は終わっている。

エブリンがロジャー・フォリー Roger Folley と出会ったのは、彼女が女性農耕部隊についての絵画の素材を探求しに行った Sparsholt Farm Institute であった。フォリーは、そこで農業経済学者 agricultural economist として働いていた。フォリーは、戦時中は、空軍の偵察パイロットとして従軍していた。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

戦後、空軍から復員したフォリーは、エブリンとともにウォリックシャーの Long Compton に新居を構える。1947年にフォリーがオックスフォードの University Agricultural Research Institute に就職するのにもとない、彼らはオックスフォードに近い Enston に移る。オックスフォードでは、エブリンもアレゴリーについての連作など絵画制作に専念しながらパートタイムで教職にも就く充実した時代であった。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

1950年にフォリーは、ケント州のワイカレッジの農業経済学部 the Agricultural Economics Department of Wye College に就職する。その後、ワイの近くに居を移す。このころ、エブリンは、ケントのアシュフォードに同様な信仰グループを見つけ親交を深めたことから、彼女のクリスチャン・サイエンスの信仰は強化された。1953年に、エブリンはワイカレッジで、小さな個展を開催した。1957年に、夫妻はノースダウنز North Downs のステーブル・ファーム Staple Farm と名付けられたファームハウスに転居した。1960年5月12日にエブリンは、夫と一緒に庭でえんどう豆の支柱を集めている時に、突然、倒れて、亡くなった。彼女は53歳の時であった。病名は心臓病(冠動脈アテローム Coronary atheroma)と診断された。(Llewellyn & Liss 2015; Campbell-Howes 2016)

I 章で紹介した3冊の先行研究にみるように、1960年に亡くなったエブリン・ダンバーの再評価は、近年はじまったばかりである。特に、戦後にエブリンの描いた作品の多くは、死後、残念ながら散逸してしまい全体像をつかむのが難しい。肖像画や風景画などの作品は、親戚や友人などに記念に譲られたものも多い。エブリンにとっての終の住処ステーブル・ファームの屋根裏部屋に、多くの未発表の作品がそのまま保存されているのが、発見され、2015~16年に企画展が行われた (Llewellyn & Liss 2015)。

Ⅲ. 公式戦争画家エブリン・ダンバーと女性農耕部隊 (Women's Land Army)

ⅰ) 公式戦争画家として女性農耕部隊を描く

キャサリン・パルマー Kathleen Palmer の『女性戦争画家 Women War Artists.』(2011)によると、エブリン・ダンバーは、フルタイムで給料を支給された公式戦争画家 (full-time salaried artist) として戦争芸術家諮問委員会 WAAC に雇用された。この契約は、1940年3月、女性の6つのボランティアな任務についての画題の依頼から始まった。この契約で、4点の作品が買い上げられた。次に1941年8月に看護の画題で絵画を描くことを依頼された。1942年10月に6か月の

給与と作品ごとの手数料で依頼 (salaried commission) が行われた。さらに同様な契約は、1943年9月に6か月間、1944年3月に6か月間行われた。以上の契約によって、エブリン・ダンバーは、合計40点の作品が戦争芸術家諮問委員会 WAAC に買い上げられた (Palmer 2011)。

ダンバーが依頼された女性の銃後の活動を描く絵画のうち、女性農耕部隊の画題は大きな割合を占める。ダンバーの描いた女性農耕部隊に関する代表的な作品を概観すると次のような内容に分類できる：

- a) 農業技術のトレーニングをする女性農耕部隊に関する画題：乳牛の人工的装置を使用して搾乳の練習する女性隊員を描いた *Milking Practice with Artificial Udders* (Oil on canvas 61 × 76cm)、酪農の訓練の作業場を描いた *Women's Land Army Daily Training* (Oil on canvas 51 × 76cm) など。さらに、先に紹介した *A Book of Farmcraft* (1942) は、女性農耕部隊の訓練所 Sparsholt Farm Institute の指導者 Greenhill と共同で執筆したものであるが、これはダンバーが女性隊員の作業の方法や身体の使い方の正誤を図解していて、慣れない女性隊員にとって農作業を効率よく身につけるための教則本のような役割を果たした (図3・4参照)。
- b) フィールドで農作業する女性農耕部隊に関する画題：機械を使用する馬鈴薯の仕分け作業を描いた *Potato Sorting, Berwick* (Oil on canvas 30 × 75cm)、1944年の牧歌的な風景としてリンゴの果樹の剪定に勤しむ女性隊員たちを描いた作品 *A 1944 Pastoral: Land Girls Pruning at East Malling* (Oil on canvas 61 × 76cm) など
- c) 宿舎で生活する女性農耕部隊に関する画題：女性農耕部隊の宿舎の食堂の列を描いた *Women's Land Army Hostel* (Oil on canvas 22.5 × 22.5cm)、宿舎の部屋で就寝の準備をする女性隊員たちの光景を描いた *Land Army Girls going to Bed* (Oil on canvas 51 × 76cm) など

以上のように、ダンバーは、a) 農業技術のトレーニング、b) 野外での実地の農作業、c) 作業を終えた後の宿舎での生活と、女性農耕部隊の女性隊員の当時の生活を丁寧に絵画に描き記録した。

戦時の農村落の代替労働力である女性農耕部隊 Women's Land Army は、軍隊 Army と同様な組織の形態で運営され、都市部からも女性農耕部隊員をリクルートした。女性農耕部隊に入隊が許可されたものには、オーバーオール2着、帽子、ズボン、レギンズ、ジャージ、厚底の靴、コートなどの制服が支給された (Powell 2009, Shewell-Cooper 1941; 2011など)。女性農耕部隊の制服は、制服を着用する職業に憧れる女性にとっては、魅力の一つともなった (林田 2013: 101-102; Clarke 2008など)。代替労働力とはいえ、若い女性が女性農耕部隊として農村落に集団で入り、農作業を行うにあたっては、地元との葛藤があり、彼女たちに規律と秩序が求められた。女性農耕部隊の制服がその規律と秩序の表象であった。

また、農作業になじみのない都市部出身の女子にも、ダンバーが、a) 農業技術のトレーニングの画題で描いたように、農業技術を身につけるように、組織的に訓練を行ったのちに、農村落に女性農耕部隊員として派遣された。

ダンバーは、女性農耕部隊の記録として、女性農耕部隊員が制服を着用して行っている農作

業中の姿も、一日の作業を終えて、宿舎に帰ってから、食堂での様子や部屋で就寝準備するプライベートの生活の時間も、トータルに女性農耕部隊の生活として描いて記録している。

ダンバーの描いた女性農耕部隊についての作品の中で、最も注目されているのが、次に考察する *A Land Girl and the Bail Bull* である。これは、先の分類では、b) フィールドで農作業する女性農耕部隊に関する画題に含まれる。

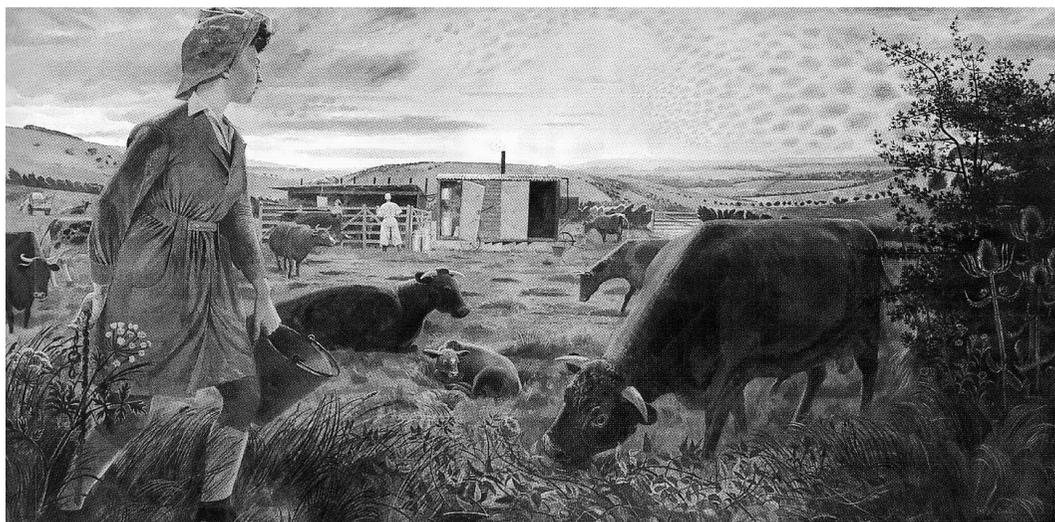


図5 Evelyn Dunbar (1906-1960) *A Land Girl and the Bail Bull* 1945 (Oil paint on canvas 91.4 × 182.9cm) Room 1940, Tate Britain, London. Presented by the War Artist Advisory Committee 1946.

ii) *A Land Girl and the Bail Bull* (1945) を鑑賞する

A Land Girl and the Bail Bull (1945) は、ロンドンのミルバンクにあるテート・ブリテン美術館 Tate Britain に、常設展示されている。この作品は、現在、ロンドンにおいて常設展で見ることのできる唯一のダンバーの作品である。

英国美術の展示に特化された美術館のテート・ブリテンでは、1545年から現在までの英国人が制作した美術作品の傑作を年代順に展示する ‘Walk through British Art’ と題する常設展示を行っている。‘Walk through British Art’ の鑑賞者は美術館の回廊の部屋から部屋へと示された順路通りに歩いて展示作品を見てまわると、英国美術の500年の歴史をそれぞれの時代を代表する美術作品から実感することができる。英国人にとって、テート・ブリテンの ‘Walk through British Art’ は、英国美術の500年の歴史を具体的な作品と対面して鑑賞することを通して、英国の領土が生み出した芸術作品について共感することで自らのナショナル・アイデンティティを再確認する場所でもあろう。エブリン・ダンバーの女性農耕部隊をテーマとした油彩画 *A Land Girl and the Bail Bull* (1945) は、二部屋連なる「1940年代の部屋 (Room 1940)」に常設展示されている。筆者が訪れた2017年夏には、*A Land Girl and the Bail Bull* は、南北方向に二部屋

続く「1940年代の部屋 (Room 1940)」のうち北側の部屋で、隣にターナーコレクションへの通路がある東側の壁に掲げられていた。この絵は横長の、91.4 × 182.9cm の大きさであり、ダンバーの作品のすぐ手前の空間には、同時代の女性芸術家バーバラ・ヘップワースの彫刻のオブジェ *Pelagos* 1946が展示されている。美術館ではダンバーの *A Land Girl and the Bail Bull* について次のような解説が掲示されている：

Dunbar was established as a mural painter, working at Brockley School in Kent, before she was appointed an Official War Artist in 1940. She was commissioned to record the ‘Land Army’ at work. This picture, she said, was ‘painted at Strood towards the end of the war, about 1944-5. It is an imaginative painting of a Land Girl’s work with an outdoor dairy herd on the Hampshire Downs. The bail is the moveable shed where the milking is done.’ The bull is enclosed within it. (Tate Britain Gallery label September 2016)

この展示解説の内容は、I 章の a) で紹介した先行研究であるクラークによるダンバーの伝記の記述に依拠している (Clarke 2006: 129-131)。また、クラークによるダンバーの伝記の表紙には、この作品 *A Land Girl and the Bail Bull* が使用されている。この展示解説の内容は：

- a) ダンバーはケント州のブロックリー学校の壁画を描いて壁画家として確立したこと
 - b) 彼女は、1940年に公式戦争画家として、女性農耕部隊の仕事を記録する契約をかわしたこと
 - c) 本絵画は戦争末期1944-45年にかけて Strood (ダンバーの実家のある地名) で描かれたこと
 - d) 本絵画は、心象絵画 an imaginative painting で英国南部のハンプシャー・ダウンズ Hampshire Downs の放牧地での Land Girl (女性農耕部隊員) の酪農の労働を描いていること
 - e) bail とは搾乳を行うための可動式の簡易な建物のこと
- の5点にまとめられる。

本絵画の表題にもある *the Bail Bull* の bail とは、上の e) に示されるように、搾乳を行うための可動式の簡易な建物のことであり、この絵の後方に描かれている建物である。Bail の意味であるが、手元の英和辞典で確かめたところ、それに近い意味としては「(豪) (馬屋・牛舎の) 仕切り (の横木)」 「bail up (豪) (搾乳のために) 〈乳牛を〉 仕切り枠に固定する」 (『小学館プログレッシブ英和中辞典』) とあり、オーストラリアで使われる農業用語であるようだが、e) で示されるような意味は一般的ではないようだ。Llewellyn & Liss の解説によると、bail は、オーストラリアの農業用語で、牛や馬の可動式の木製の端綱 a movable wooden halter を意味するという。それは搾乳するときに用いられたため、車輪のついた搾乳のためのポンプのある移動車 the wheeled shed housing the milking pump engines も含める用語に転じたと記されている (Llewellyn & Liss 2015: 139)。

戦中に女性農耕部隊の訓練も行った研究機関 Sparsholt Farm Institute に、当時、勤めていた農

業経済学者であったダンバーの夫のフォーリーに、クラークが、当時の bail をめぐる農業について聞き取りを行った。それによると、搾乳のための可動式の小屋である bail は、仕切り stalls が4つもしくは5つあり、それぞれに乳牛を搾乳するための吸引ホースとポンプがつながっていて、効率的に乳牛の搾乳を行うことができるポンプ車のような仕組みであった。フォーリーによると bail は、英国の戦時中にものみ使用されていた簡易な代替装置であり、その地理的分布に関しては英国ではハンプシャーあたりで最もよく使用されていた。その理由は、ハンプシャー・ダウンズの土壌は、軽い砂 light soil から構成されているため、いったん雨が降ると、乳牛が搾乳のために頻繁に通って行き来すれば地面は湿気を帯びてぬかるみ泥の湿地のようになる。そこで、乾いた地面を求めて装置を容易に移動できるように工夫したのが、bail であると語られる (Clarke 2006: 136)。

ダンバーは、本絵画で表題にも bail という語を含め、bail のある農業景観を描くことで、英国内のハンプシャー・ダウンズという地域性と戦時中という時代性を、女性農耕部隊の図像とともに絵画の中に刻印したと考えられる。

クラークの著作によると、ダンバーはこの絵を描いた11年後の1956年5月7日にこの絵について次のような記述をしているという。先のテート・ブリテンの展示解説ラベルと重なる部分もあるが次に引用する：

It is an imaginative painting of a Land Girl's work with an outdoor dairy herd on the Hampshire Downs. The bail is the movable shed where the milking is done. Soon after dawn in the early summer the girl has to catch and tether the bull: she entices him with a bucket of fodder and hides the chain behind her, ready to snap on the ring in his nose as soon as it is within her reach – a delicate and dangerous job. (Clarke 2006: 131)

ダンバーは、本絵画の画面の構成として、彼女が壁画制作で身につけたドラマチックな一瞬を捉えて心象的に描くという技法を採用した。左側の前景に女性農耕部隊員の女性が、右側の前景に描かれる茶色の雄牛の方向を向いて対峙している。初夏の夜明けの空は、やわらかな朝焼けの陽光が見られ、鱗のような雲と光の帯が、波を打って右側から中央への空に流れる。ダンバーは、この雲を「孔雀の空 the peacock sky」と呼び、地平線の早朝の光の効果を強調した (Clarke 2016: 131)。左側の空には、灰色の雲が帯のように描かれ、地平線には朝焼けを待つ光が見える。初夏の早朝の張り詰めた空気が感じられる。そのような一瞬に女性農耕部隊員の女性は、雄牛を捉えて鎖で繋げなければならない。彼女は飼料の入ったバケツを左手で差し出して雄牛を誘う。一方、鎖を持っている右手は身体の後ろに隠している。一瞬で雄牛に近づき、鼻輪を捉え鎖でつながなくてはならない。繊細で危険な仕事である。

この絵画の主人公ともいべき女性農耕部隊員の女性の上半身は、緑色の女性農耕部隊の制服のスモック・コートを着用して帽子をかぶっている。下半身は、ぬかるみの農作業にも耐えられるウエリントンブーツとレギンズを履いていて、農作業がしやすい動きやすい服装である。

制服のスモック・コートはウエストが絞られていて、丈は膝上までであり、身体の線が出ないような保守的なデザインである。

牛の群れが放牧され、草を食んでいる牧草地は、野草や野生の花々が咲き乱れるワイルド・ガーデンのように描かれている。雄牛と対峙する女性農耕部隊員の女性が行う農作業は、夜明けを迎える英国の放牧地の中、詩的な祈りのように描かれている。遠景には、生垣によって区切られた、手入れの行き届いた耕作地と牧草地を望むことができる。この牧歌的な領野が英国の守るべき銃後の国土として描かれている。

Margaret Garlake は、『新しい芸術と新しい世界：戦後社会における英国の芸術 *New Art New World: British Art in Postwar Society*』において、ダンバーの本絵画について、戦後の新しい価値観を先取りしていると評価する。ダンバーの描く絵画には、階級による差異が描かれていない、有閑 *leisure* が描かれていない、19世紀的な価値観である「生活の甘い蜜は金持ちへ、生活の苦渋は貧乏人へ」ということを象徴的に示唆するような差別的な暗い断片がない。つまり、ダンバーの描く絵画には、因習に対するノスタルジックな身振りがない (Garlake 1998)。さらに、Garlake は、ダンバーの本絵画には、農業労働におけるジェンダーの転換が見られると分析する。伝統的な絵画に見られるように女性が女羊飼 *shepherdess* や乳搾り女 *milkmaid* のような装飾的な地位として描かれるのではなく、本絵画では、農作業の画題において、女性が農耕部隊員として、主役であり、雄牛を捉えようとしている瞬間を捉えたように、女性が能動的に農業をする主題として描かれている (Garlake 1998: 97-98; Clarke 2006)。

IV. エブリン・ダンバーと戦時のガーデニングとジェンダーの文化地理学

近年、特に第一次世界大戦100周年(2014年)を迎えたのを契機に、英国では戦時の生活を回顧するような多数の出版物が刊行され、展覧会が開催された。ガーデニングに関しても、庭園史専門家による解題を付して戦時の刊行物が復刻刊行されている (Middleton, 2009 [First published in 1942]; Way, 2009; Fearnley-Whittingstall, 2010など)。英国では、このように戦時下のガーデニングについて見直し、再発見するような学術研究が進展しており、本稿でもこのような流れを共有する。

第二次世界大戦以前の英国の統計によると、英国は食糧の多くを輸入に頼っており、戦時における英国国民への食糧供給の状態は脆弱であった。1938年は全体で5500万トンの食糧を商船により輸入していた。たとえば玉葱の90%はヨーロッパ大陸より輸入しており、果物は南アフリカ、オーストラリア、小麦はカナダや米国から輸入していた。実際に、第一次世界大戦時には、ドイツによる経済封鎖の影響で英国国民の食料供給は大打撃を受けた (Short, Watkins and Martin Eds. 2006)。

そこで1939年に英国の農務相により発案され、1940年から国家的規模の戦時キャンペーンとして広報され、国民の生活のあらゆる場面で、食糧の自給のためのガーデニングが推奨される。はじめは、「自分で食べる食糧を育てよう *Grow your own food*」という言葉が使われ宣伝されたが、次第に「*Dig for Victory* = 勝利のために土を耕そう」という意味の愛国的なスローガンが多

用された。同時に、王立公園や広場、コモンズなどの共有地をアロットメントなどに提供できるように戦時の法整備も行われた (Cowan 2014)。

図6は、Dig for Victory キャンペーンの最も有名なポスターである。男性の左足が踏鋤を踏んで、土を掘り起こして、耕している写真が、中央に描かれ、上部に Dig for Victory の文字が、赤地に白抜きで配される。キャンペーンの初期の1941年に作られたポスターであり、国民の一人一人が、力強く肥沃な国土を耕すことで、戦争に勝利を導くことができるというメッセージが発信されている。

戦時における国民への食糧供給については、国家に統制され、配給制となった。Dig for Victory の名のもとで、食料自給のためのガーデニングのマニュアル、レシピ本などが刊行され、ポスターやラジオで宣伝された。Dig for Victory キャンペーンは、第二次世界大戦下の英国において、全ての階級にアピールし、もっとも成功したキャンペーンだとされる。園芸協会（全国レベルの王立園芸協会から地域レベルまで）が Dig for Victory キャンペーンを遂行する上で、大きな役割を果たした。戦時を通じて園芸協会は園芸ショー Horticultural Show を開催した。そこは、金賞、銀賞などガーデニングの技能を競い合いながら、知識、技術を交換する場所であった。

20世紀の二つの世界大戦を契機に、女性がそれまでは男性の領域とされたガーデニングを含む農作業を行うことが社会的に認められた。特に英国の戦時中は、階級を超えて、さらに女性や子どもを含む国民を皆アマチュア・ガーデナーとして食料生産にあたることを国策としてすすめる Dig for Victory キャンペーンが行われ、それ以降、女性とガーデニングの関係性が刷新された。

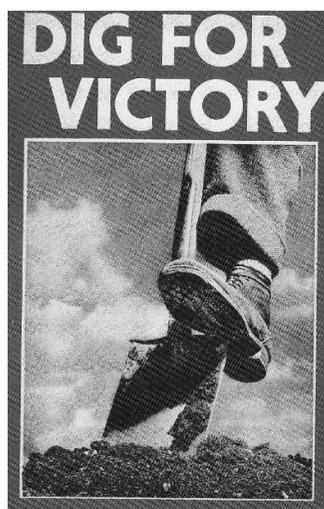


図6 Dig for Victory のキャンペーンのポスターの図像 Unknown: Dig for Victory (1941) British Poster, Second World War, Imperial War Museum (Art. IWM PST 0059) (Richard Slocombe (2015) *British Posters of the Second World War*. Imperial War Museums.)



図7 女性農耕部隊のリクルートのためのポスターの図像 Clive Upton: *For a healthy, happy job - join the Women's land army*. British Poster, Second World War, Imperial War Museum (Art. IWM PST 6078)

アロットメントなどで行われる生産性を強調するガーデニングの文脈においては、女性農耕部隊の農作業も、生産性を追求する広義のガーデニングだと位置づけられる。エブリン・ダンバーは、女性農耕部隊の活動については公式戦争画家としての契約もあり、熱心に描いたが、Dig for Victory の流れのガーデニングについては、Strood のアロットメントを描いた作品は存在するが、あまり熱心には描いていないように思われる。あるいは、女性農耕部隊についての作品は、戦争芸術家諮問委員会に買い上げられたため、現存するが、他のガーデニングについての作品は散逸した可能性もある。

図7は、Clive Upton のデザインによる女性農耕部隊のリクルートのためのポスターである。女性農耕部隊の活動も、第一次世界大戦中の1917年に始まり、第二次世界大戦でも、農村落の代替労働力として、組織的にリクルートされ、農作業を訓練され、派遣された。ポスターでは「健康的で、幸せな仕事 For a healthy, happy job」という見出しの下に、女性農耕部隊員の女性は農具を左手に持ち、女性農耕部隊の制服を着用して、フィールドを見つめる女性が描かれている。遠景には、秩序だって耕された小麦畑が描かれる。耕された小麦畑は、女性農耕部隊員が守るべき豊かな国土の表象である。女性農耕部隊の制服を通じて、女性の作業着姿は社会に受容されつつあった。しかしながら当時は一般的には女性のズボン姿は社会にまだ受け入れがたかったことが記録される。

戦後、ジーンズなどの作業着ズボンの着用が、女性たちの間に、浸透することを考えると、女性農耕部隊の女性たちは、ファッションの上でも、戦後の女性たちの先駆けといえるのではないだろうか。

戦時のキャンペーンに見る庭園の視覚化イメージが発動する美、健康、幸福、家庭、モラル、エコロジー的な意味や価値観は、階層化され、ジェンダー化されながら、社会、自然、身体について再帰的な関係にあった。

ダンバーの女性農耕部隊の作品で描かれた、女性農耕部隊員が自ら雄牛と対峙して行う大胆で繊細な農作業は、訓練によって獲得した農業技術と自らの経験によって培った工夫や知恵によって、日々積み重ねられた結果であることが理解できる。女性農耕部隊員が行った農作業は、誰にでもできる単純労働ではなく、彼女たちの戦後のキャリアにもつながるような農業技術の獲得にも通じていた。ジェンダーの視点からいうと、Garlake (1998) が指摘したように、女性が農業労働において補助的な労働のみを行う従属物ではなく、農業の担い手として能動的な中心主体となる可能性が、戦後の転回として開かれていた。

たとえば、第二次世界大戦後の1945年10月英国の非政府組織の Economic League から *Going on the Land?: A Guide for Service Men and Women* と題するパンフレットが刊行された。このパンフレットは戦地から帰還した男性たちに向けてだけでなく、女性農耕部隊を経験して農業の技術を身につけた女性たちに向けても戦後の生活設計の選択肢の一つとして、農業起業の可能性と現実的な手順を概説している。

Sackville-West の資料によると、女性農耕部隊に参加した若い女性は、のべ240,000人にのほるといふ (Sackville-West 2016; 1944)。英国では女性農耕部隊に参加した女性たちが、現在高齢

になるなか、彼女たちの業績を記憶し、顕彰しようと活動している。第一次世界大戦100周年にあたる2014年10月21日、スタッフォードシャーにある国立戦争記念樹木園 National Memorial Arboretum (Alrewas, Staffordshire) においてウェセックス伯爵夫人ソフィーを招いて女性農耕部隊の記念像の除幕式が行われた (<http://www.womenslandarmytribute.co.uk>; Sackville-West 2016)。

謝辞

本研究は、JSPS 文科省科学研究費補助金 (課題番号26370938, 17H02430, 26284132) による成果の一部である。本稿の一部は、2017年度地理思想科研研究会 (「科研費基盤研究B: 場所・物質・人の関係性に注目した知の形成に関する地理学史研究」) (2017年12月17日大阪府立大学 I-site なんばにて開催) にて発表した。有益なコメントをいただいた先生方、特に福田珠己先生、遠城明雄先生、源昌久先生、荒又美陽先生、影山穂波先生、島津俊之先生、中島弘二先生、山野正彦先生に感謝申し上げます。特にエブリン・ダンバーと女性農耕部隊を経験した女性たちの戦後の具体的な展開とその評価についての議論は、本稿脱稿後であったため、引き続き今後の課題とする。

参考文献

- Buchan, U. (2013) *A Green and Pleasant Land*, Hutchinson, London.
- Clarke, Gill (2006) *Evelyn Dunbar: War and Country*. Sansom and Company Ltd. Bristol.
- Clarke, Gill (2006) 'The Women's Land Army and its recruits, 1938-50.' (p101-116) in Short, Brian; Watkins, Charles and Martin, John Eds. (2006) *The front line of freedom: British farming in the Second World War. (The Agricultural History Review Supplement Series 4)* British Agricultural History Society.
- Clarke, Gill (2008) *The Women's Land Army: A Portrait*. Sansom and Company Ltd. Bristol.
- Campbell-Howes, Christopher (2016) *Evelyn Dunbar: A Life in Painting*. Romarin.
- Campbell-Howes, Christopher (2015) 'Afterword' (p.225-237) in Dunbar, Evelyn and Mahoney, Charles. (2015) *Gardeners' Choice*. Persephone Books Ltd.
- Cowan, C. (2014) 'Dig for Victory' *The London Gardener* 18. The London Historic Parks and Garden Trust.
- Daniels, Stephen and Nash, Catherine (2004) 'Lifepaths: geography and biography' *Journal of Historical Geography* 30 (p.449-458)
- Dunbar, Evelyn and Mahoney, Charles. (1937 初版; 2015 復刻版) *Gardeners' Choice*. Persephone Books Ltd. (初版は Routledge & Sons.)
- Economic League (Central Council) (1945) *Going on the Land?: A Guide for Service Men and Women*. London.
- Fearnley-Whittingstall, J. (2010) *The Ministry of Food*, Hodder & Stoughton (In Association with the Imperial War Museum.)
- Garlake, Margaret (1998) *New Art New World: British Art in Postwar Society*. Paul Mellon Centre for Studies in British Arts.
- Ginn, Franklin (2012) 'Dig for Victory! New histories of wartime gardening in Britain' *Journal of Historical Geography* 38, 294-305.
- Helphand, Kenneth (2006) *Defiant Gardens: Making Gardens in Wartime*. Trinity University Press.
- Llewellyn, Sacha & Liss, Paul (2015) *Evelyn Dunbar: the Lost Works*. Pallant House Gallery.
- Harries, Meirion and Harries, Susie (1983) *War Artists*. Michael Joseph in Association with the Imperial War Museum and the Tate Gallery.
- Middleton, C.H. (2009; First 1942) *Digging for Victory*. Aurum Press.
- Palmer, Kathleen (2011) *Women War Artists*. Tate Publishing.

- Powell, Bob and Westacott, Nigel (2009) *The Women's Land Army*. The History Press.
- Rose, S.O. (2003) *Which People's War? National identity and citizenship in Britain 1939-1945*. Oxford University Press.
- Sackville-West, Vita (2016; First published 1944) *The Women's Land Army*. Unicorn Publishing Group.
- Shewell-Cooper, W.E. (2011; First published 1941) *Land Girl: A Manual for Volunteers in the Women's Land Army 1941*. Amberley Publishing.
- Smith, D. (2011) *The Spade as Mighty as the Sword*, Aurum Press.
- Slocombe, Richard (2015) *British Posters of the Second World War*. Imperial War Museums.
- Storey, Neil R. and Housego, Molly (2012) *The Women's Land Army*. Shire Publications.
- Tachibana, Setsu (2000) *Travel, Plants, and Cross-cultural Landscapes: British Representations of Japan, 1860-1914*. PhD thesis submitted to the University of Nottingham.
- Tachibana, Setsu; Daniels, Stephen; and Watkins, Charles (2004) 'Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation' *Journal of Historical Geography* 30-2 (364-394) Elsevier Ltd.
- Tachibana, Setsu and Watkins, Charles (2010) 'Botanical Transculturation: Japanese and British knowledge and understanding of *Aucuba japonica* and *Larix leptolepis*, 1700-1920' *Environment and History* 16-1 (43-71)
- Tachibana, Setsu (2014) 'Contested Geographical Knowledge and Imagination: A.H. Savage Landor and Victorian British Writings on Hokkaido' *Japanese Contributions to the History of Geographical Thought* (10) Edited by Shimazu, Wakayama University, (9-28)
- Tachibana, Setsu (2014) 'The "Capture" of Exotic Natures: Cross-cultural Knowledge and Japanese Gardening in Early 20th Century Britain' 『人文地理』 66-6 (4-18)
- Way, T. (2009) *A Monthly Guide to Better Wartime Gardening*, Sabrestorm.
- Way, Twigs and Brown, Mike (2010) *Digging for Victory: Gardens and Gardening in Wartime Britain*. Sabrestorm Publishing.
- Way, T. (2015) *The Wartime Garden*. Shire Publications.
- 橘セツ (2006) 「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」『神戸山手大学紀要』 第8号 (89-106)
- 橘セツ (2008) 「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティーの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」『神戸山手大学紀要』 第10号 (31-49)
- 橘セツ (2009) 「庭園のなかの野生と異文化：ウィリアム・ロビンソン『ワイルド・ガーデン』(1870)の思想と実践について」『神戸山手大学紀要』 第11号 (141-156)
- 橘セツ (2010) 「英国のカントリーハウス庭園とポライト・ツーリスト：19世紀後半から20世紀のニューステッド・アビーを中心に」『神戸山手大学紀要』 第12号 (71-89)
- 橘セツ (2012) 「近代英国のガーデニングとモラル：ジョン・クローディアス・ラウドンとジェーン・ラウドン夫妻の思想と実践からの考察」『神戸山手大学紀要』 第14号 (151-166)
- 橘セツ (2013) 「都市の観賞植物と庭園の変容：近代英国における園芸とモラルの実践」日本地理学会ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ監修、池谷和信編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻生き物文化の地理学』海青社 (301-323)
- 橘セツ (2015) 「資料紹介：英国ヴィクトリア時代に活躍した風刺挿絵画家リチャード・ドイルの一書簡」『神戸山手大学紀要』 第17号 (1-7)
- 橘セツ (2016) 「1950年代に活躍した英国人著述家マージェリー・フィッシュによる庭園の語りから試みるホームとジェンダーをめぐる庭園の文化地理学」『神戸山手大学紀要』 第18号 (43-57)
- 林田敏子 (2013) 『戦う女、戦えない女：第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』人文書院
- 星珠枝・橘セツ (2011) 「園芸家半田たきの明治後期の英国留学：家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点から」『神戸山手大学紀要』 第13号 (79-111)